BMCプログラム海外派遣報告書

生体膜機能学研究室 博士前期課程1年
蘇木 明日香

派遣先：University Medical Center of Groningen

滞在期間：2008/12/13～12/28

約二週間、オランダの北東の都市Groningenにある University Medical Center Groningen(UMCG)で海外での研究生活の体験と実験方法の習得を目的に滞在した。Groningenはとても治安の良い町で、旧市街と新市街が明確に分かれておらず新しい文化とふるい文化が融けあう街だった。オランダらしく運河に囲まれた中心地の一角にGroningen大学の本部はある。そこから自転車で20分ほど北上したところに理学系の研究等のあるキャンパスがある。私が通ったUMCGは大学本部より徒歩で10分ほどのところにある病院と併設されており、研究棟と病院は繋がっている。私がお世話になったProf.Dr.D. Hoekstraの研究室は培養細胞やマウスやその組織などを用いて上皮形成や極性の研究を病理学的な観点とあわせて解析している。私は金澤研のOBの大垣博士の下で、実験を手伝わせていただいた。

(Groningen大学本部)

研究室には修士、博士課程の学生が10人ほどおり、そのほかにポスドクとテクニシャン、四人のPIがいた。留学生が多く、セルビア・ハンガリー・トルコ・パキスタン・フィンランドなど国際的だった。皆朗らかで、英語の不得意な私にも親切に教えてくれたのでとても楽しく過ごせた。研究室は教授室も学生のいる部屋も、人がいるときにはドアを開けておく、という習慣らしく、とてもオープンな環境だった。同様にオランダの家の窓は大変大きく、カーテンもないのが特徴だった。それは宗教的な理由でオープンにすることで、自分たちの清さを表しているそうだ。研究室の窓も大きく、晴れた日には10階にある実験室からはGroningenの街とその向こうの郊外までがパノラマに見えてとてもきれいだった。そのような環境で日々で二週間研究することはとてもすがすがしく感じられた。

(実験室)

オランダの人々は気さくで陽気な人が多く、知らない人が突然何か笑いながら話しかけてきたりした。オランダ語なので意味はわからなかったが。研究以外にも博士課程の学生たちに寿司をリクエストされて振まったり、修士の学生にクリスマスマーケットのアイススケートに誘ってもらったり、と楽しく過ごすことが出来た。

実験をするのには短い期間だったのでひとつのデータを出すのがやっとだったが、普段酵母を使用している私にとっては培養細胞を用いた系は非常に新鮮だった。また今回の派遣をきっかけに極性にも興味を持ち、自分の研究に対して新しい観点がもたらされた。他にもいろんな年齢、ポストの人がおり、刺激を受けることが出来た。島国の日本とは状況が違うかもしれないけれど、みんな積極的に、前向きに行動し、研究や生活に取り組んでいると思った。

(UMCG外観)